

YMCA Camp Stories vol. 24

高橋 伸

Takahashi Shin

国際基督教大学 客員准教授
元アジア・オセアニア・キャンプ連盟事務局長
東京YMCA国際委員



願いを伝えるキャンプ

▼大学の授業で学んだYMCAキャンプ

私が北米の組織キャンプを知ったのは、今から半世紀も前の大学の授業でした。恩師であり東京YMCA野尻学荘のプログラムディレクターでもあった高橋和敏先生からアメリカのサマーキャンプの映像を見せていただき、2週間の長期間であることや、湖のほとりにキャビン、食堂、水上活動やスポーツ施設、創作工房などの施設が整っていること、そしてそのスケールの大きさに驚きました。

また、野尻学荘創始者の小林弥太郎氏を師と仰ぐ三隅達郎先生からは、戦前にカナダ留学中に参加したキャンプで、リーダーが先に食事を済ませ、子どもたちの食事の際にウェイターを行っていたこと、それは食事をしているときに子どもたちの心と身体の状態をよく観察するためだったと聞きました。その子どもたちへの配慮の姿勢が強く印象に残り、北米で始まった組織キャンプが「子どもたちのために、大人が本気で専用の施設やプログラムを作って行うキャンプ」であることに感動しました。

▼リーダーとして育てられて

私は大学3年生から東京YMCA世田谷ランチで中学生グループのリーダーを始めました。キャンプの前のミーティングでは、今の子どもたちに必要なことは何なのか、どんなキャンプにしたいのか、キャンプで何ができるのか、どんなことを伝えたいのか、そして今年のキャンプのテーマは何にしようなどと、取り留めのない話や議論をしました。私は大学入学まで部活動中心の生活で、友だち以外の他人のことなど考えたこともなかったので、始めは何の話をしているのかさっぱりわからず、それぞれの意見を述べるリーダーたちが大人に見えて、ただひたすら聞いているだけでした。しかしながら、このリーダー会でのミーティングや準備、そして子どもたちと過ごしたキャンプが、その後の私の仕事や他のキャンプでも大いに役に立っています。本当の意味で子どもたちに良いことは何か、目的を果たす活動とは何か、キャンプを通して伝える・伝わるにはどうしたら良いかなど考えるようになりました。

▼キャンプは「願いの集合体」

キャンプにはさまざまな活動があります。キャンプファイアー、水上プログラム、野外活動、スポーツ活動、創作活動、グループ活動・・・、さらにキャンプファイアーだけでも儀式的なカウシルファイアーと火を囲んで楽しく過ごすボンファイアーがあります。また私はプログラムが終わって、キャンパーがそれぞれキャビンに向かう時のようなゆったりした時が好きなのですが、キャンプ中は“特に活動をしていない時間”もまた大切にしたい時間です。



それぞれのプログラムを始め、キャンプ全体にはスタッフやリーダーの思いが込められています。また、その思いが長年積み重なって築き上げられた伝統的なプログラムもあります。一つ一つの活動には、こんなことを体験して欲しい、感じて欲しい、考えるようになって欲しい、などさまざまな思いが込められているのではないのでしょうか。ですからキャンプは、キャンプに関わる人々の「願い」の集合体であり、キャンプは「大人の願いを子どもたちに伝える」ところではないかと思っています。



アメリカ・メイン州の Camp O-AT-KA にスタッフとして参加した高橋さん（写真中央）と現地の子どもたち

Profile



学生時代に東京YMCAリーダーを経験。

1975年

東海大学社会体育学科卒、国際基督教大学（ICU）保健体育科教員となる。

1988年

「東京 - フロストバレーYMCAパートナーシップ」サマーキャンプ参加。

1998、2006、2014年

米国メイン州 Camp O-AT-KA サマーキャンプ参加。

2001～2008年

東京YMCA野尻学荘参加。現社会福祉法人興望館キャンプ長

ICUジュニア・キャンパス・キャンプ キャンプ長